2025年 第50回

視点

全国公募写真展

写真はいずれも２０２４年「視点」の入選・入賞作品です

個性豊かな写真を募ります

一人で何点でも応募できます

作品募集

テーマ、内容は自由

単写真または最大8枚までの組写真
（ヤング部門は5枚以下）
写真サイズ A4または六切のプリント
応募資格にいっさいの制限はありません

送付受付 1月15日(水)～2月15日(土)

展　示：**東京都美術館**（上野公園内）
会　期：6月6日(金)～6月13日(金)
巡回展：関西、仙台、三重、富山

全入選作品を収録した写真集「視点」を同時刊行

視点賞「５類の賑わい」（５枚組）宮本壽男

「オラが村の90代」（5枚組）豆塚猛

「守るいのちー被曝牛との日々ー」（５枚組）藤田篤男

「視点」各賞 ヤング部門 あります

視点賞	1名	土門拳揮毫「視点」額（賞状と賞金 30万円）
50回記念特別賞	1名	（賞状と賞金 15万円）
奨励賞	3名	（賞状と賞金 10万円）
優秀賞	7名	（賞状と賞金 3万円）
特選	10名	（賞状と賞金 1万円）
ヤング賞	1名	（賞状と賞金 5万円・副賞あり）
準ヤング賞	3名	（賞状と賞金 1万円・副賞あり）
入選		（賞状と写真集「視点」）

特選「豊漁を願う」（４枚組）宮原咸太郎

準ヤング賞「夜の使者」（５枚組）吉岡來美

優秀賞「天蚕の輝き」（６枚組）志摩悦子

「エンジョイ大阪」（４枚組）大久保金行

優秀賞「通勤タイム」（単）鍵本裕次

第50回 視点 選考委員

宇井眞紀子（ういまきこ）

武蔵野美術大学卒業。日本写真芸術専門学校卒業。学生時代から写真家・樋口健二氏に師事。1992年からアイヌ民族の取材に取り組む。主な写真集に、『アイヌ、100人のいま』『アイヌ、風の肖像』『眠る線路』『いのちの森に暮らすハンセン病療養所多磨全生園のいま』がある。第4回さがみはら写真新人奨励賞、第28回東川賞特別作家賞、第1回笹本恒子写真賞を受賞。日本写真家協会会員。

誰もがスマートフォンで日常的に写真を撮り、特別な技術を持たなくても背景をカッコよく変えたり「映える」写真に加工ができ、SNSで世界中に発信するようになりました。写真の記録性て何なんだろうと考える日々です。『視点』の受賞作は、時代性に富むものが多いと感じます。けれども、「社会性」と堅苦しく考えずに、日々の暮らしの中で感じた感動や違和感をご自分らしい視点で撮影した作品を見せていただきたいです。「瞬間を切り取る」写真の原点に注目したいと思います。

清水哲朗（しみずてつろう）

1975年横浜市生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、写真家竹内敏信の助手を3年間務め、23歳でフリーランスに。独自の視点で国内外の自然風景からスナップ、ドキュメンタリーまで幅広く撮影している。第1回名取洋之助写真賞、2014日本写真協会賞新人賞、2016さがみはら写真新人奨励賞。JPS会員。

意志を持った写真は強い。2024年の入選入賞作品を見ながらそう思いました。臨場感たっぷりに揺るぎのない視点で確かなメッセージが伝わってくるのは、被写体を前にしても動じず、光を読み、適切な距離に入りながらタイミングを図ってシャッターを切っているから。意志が弱い写真はどこかに隙が生まれます。あなたが何に心を動かされ、写真という手段を用いてまで意志を伝えようとするのか。受け止める覚悟はできています。

英 伸三（はなぶさしんぞう）

1936年千葉市生まれ。農村問題などを通して日本社会の姿を追い続け年から中国の改革、開放政策による変貌を追っている。伊奈信男賞など受賞。写真集『一所懸命の時代』など多数。JPS会員、JRP代表理事。現代写真研究所所長。

写真表現には、記録に基づいた表現と、撮影者独自の感性や着想に基づいた表現とがある。だがいずれの場合も、何をどのような立場で捉え、何を伝えようとしたのかという、撮影者の“視点”が明確でないと、見る者の共感を呼び、感動を与えることはできないのではないか。何を被写体とするにせよ、事象の本質と向き合い、それを劇的に伝えた、撮影者の創造主体の有り様をかたる作品をお寄せください。今回は記念すべき第50回展です。多数のご応募をお待ちしています。

中村梧郎（なかむらごろう）

フォトジャーナリスト。ベトナム戦争、枯葉剤問題を追及。元・岐阜大学教授。著書:「新版・母は枯葉剤を浴びた」（岩波現代文庫）。「記者狙撃」（花伝社2023）。ニコン第8回伊奈信男賞、05年JASTJ賞、07年NYでマグナム招待作品展。JCJ代表委員、JPS会友、JRP代表理事。

写真表現は「誰かに見てもらう」ことによって成立します。それが「伝わる」ということです。言葉や文字も相手に何かを伝えます。そうした手段を上手に使いこなせば、喜びや感動さえも伝えられます。写真は多言を要しません。たとえ1カットであっても数枚であっても、たくさんのことを表現できるツールなのです。自分の可動領域のなかで、発見した何かを作品にしてみてください。チャレンジと飛躍を期待しています。

金井紀光（かないのりみつ）

1950年生まれ。広島市出身、現代写真研究所講師。主な写真展「非電化暮らし」「8.6」「この町で」「止まったままの時計-フクシマ10年」（共同制作）。2008年、2011年、2020年（共同制作）視点賞受賞。2007年、2018年視点委員長。JRP60年現研50年記念写真展委員長。

今回、委員長を務めます。2025「視点」は50回の節目を迎えます。第1回展委員長の丹野章さんのことばが残っていますので、抜粋して紹介します。『社会的普遍性と今日性をもった魅力ある写真を作り出していくことは、何よりもそれぞれの作家の個性を基盤にして、現実の状況を見据えることのできる確かな視点を持つことから始まる』視点の原点といえる“軸”になることばではないでしょうか。視点50年の歴史に、あなたの名をぜひ刻んで下さい。

主催 日本リアリズム写真集団（JRP）／ 2025「視点」委員会
〒160-0004 東京都新宿区四谷3-12 沢登ビル6F　https://www.jrp.gr.jp　Email：jrp@jrp.gr.jp
問い合わせ先（13:00～18:00）TEL：03-3355-1461　FAX：03-3355-1462